

【論文提出者】 社会文化科学研究科 文化学専攻 文化資源論講座 無形文化資源論分野  
福西 大輔

【論文題目】 清正公信仰の研究—近世・近代の『人を神に祀る習俗』—

【授与する学位の種類】 博士（文学）

#### 【論文審査の結果の要旨】

「清正公信仰の研究—近世・近代の『人を神に祀る習俗』—」と題する本論文は、加藤清正の信仰の全容を明らかにした初めての成果である。加藤清正というひとりの戦国武将を取り上げ、彼の死後から現在に至るまでの信仰を一貫して分析したことは、本論文の大きな特色であるといえる。これまで、加藤清正の信仰は「崇り神」系統とする立場と「顕彰神」系統という説があった。それらは主として歴史学からなされた研究であった。本論文はそれらの成果を踏まえた上で、民俗学的手法を用いて清正没後から現代に至るまでの信仰の全体を明らかにした点は高く評価される。

福西氏の論文の特徴は、近世史料・近代資料・絵画・民俗資料を駆使して、時代ごとの清正公信仰をとらえようとしたことである。それらの史（資）料から、清正信仰が、①「病除け・病氣平癒」②「武運長久」③「水難除け」④「商売繁盛・芸事向上」⑤「盗難除け」という多様なものであることを明らかにした。その御利益が時代によって異なっており、清正公信仰は時代を反映したものであると提唱する。

次に、清正公信仰成立の背景として、八幡信仰と豊国信仰の影響があったとする。従来の研究では日蓮宗の一派（肥後六条門流）が信仰の発生素地と考えられてきたが、それだけではなかったことを指摘する。この段階では「顕彰神」的であった。その後、清正公 200 回遠忌を迎える 1810 年頃から、世直し神的性格を帯び始め、流行神として民衆の間に信仰が広まっていった。これは当時、天変地異などによる経済的困窮などにより人々の不満が清正公信仰と結びついた。この信仰を広めたのは、これまでの研究では日蓮宗系の遊行僧、ハンセン病患者が関与したといわれていたが、それを不受布施派の僧侶が関与したことを史料により実証した。また、土木関係者や芸能者にも信仰されるようになり、熊本だけでなく全国的な広がりを見せるようになった。さらに、明治維新後に神仏分離、西南戦争により熊本の清正公信仰の拠点であった錦山神社、本妙寺の焼失により信仰が一時期衰退するが、日清・日露両戦を経るなかで軍人の信仰を集めるようになり、「軍神」としての性格を濃くしていったとする。このように、清正公信仰は近畿地方で発生した豊国信仰の影響を受けながら、肥後国で成長し、それがやがて全国へ広がり、明治以降は北海道、韓国、ハワイにまで広がりを見せるようになる。地方で生まれた信仰が中央（江戸・東京）に及ぶということは、柳田民俗学の民俗の変遷過程と異なる見解である。この点も独創的な点である。

以上の所見により、本論文は、博士論文として適格であると判断する。

### 【最終試験の結果の要旨】

平成 22 年 1 月 13 日に行われた口述試験の結果、申請論文が学位を授与するに足る水準にあり、かつ十分な研究能力を有することが確認された。よって本委員会は、一致して福西大輔が博士（文学）の学位が授与されるに相応しいものと判断した。

### 【審査委員会】

主査 安田 宗生  
委員 鈴木 寛之  
委員 森 正人  
委員 吉村 豊雄  
委員 三澤 純